

# 日本災害看護学会 令和6年能登半島地震災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日:2024年3月3日(日)

活動者:齋藤麻子

## 1. 活動期間

2024年2月27日(火) 14時 ~ 2024年2月29日(木)15時

## 2. 活動場所

珠洲市立大谷小中学校(石川県珠洲市大谷町1字78番地)

避難所使用者数 34人(一時避難者あり) 20世帯(2月29日時点)

## 3. 石川県珠洲市の被害状況 (2月29日 14:00時点 石川県庁)

人的被害 死者:103人 うち災害関連死:6人

住家被害 全壊・半壊・一部損壊:9442棟 非住宅被害 2901棟

## 4. 避難所の状況

### 4-1. 避難者数

大谷小中学校からの2次避難者:60人(最終2月2日)、1.5次避難者:9人(最終1月29日)

～派遣期間中の避難者数の推移～

2月27日(火):33人

2月28日(水):34人

2月29日(木):34人

(二次避難所からの一時帰還者、二次避難所への避難などの出入りあり)

### 4-2. 避難所運営

避難所の運営は主に、避難所管理者および地域ボランティアによって自治運営されていた。外部支援者は、千葉県県庁職員が2名交代で常駐し、避難所運営を支援していた。日本災害看護学会所属看護職は、救護班として1名で支援活動を行った。珠洲市全域にて外部支援縮小が検討されており、2月末にHuMAの撤退をはじめとし、その他の団体も縮小について話題が上っている。大谷小中学校では、2月25日より千葉県県庁職員は2名体制へと変更になっている。さらに、2月28日からは、支援の在り方も変更し夜間常駐しないことになった。例えば、避難されている方の居住スペースに、灯油ストーブと、加湿をするためにストーブの上にやかんを置き千葉県職員が管理していたが、支援の縮小と、灯油と水の節約の観点から、避難所で使用している何台かのストーブを消灯前に消し、タイマーを1時にセットし、やかんは消灯時撤去することになった。避難所の方々は、徐々に外部支援が縮小されることについて、外部支援者がいることは安心につながっているが、縮小されていくことは当然のことと受け止めている。避難所管理者は、今後の見通しとして、寒さが和らぐと二次避難先からの帰還者で避難者数が一時的に増大することが予測されており、その対応を含めた今後の避難所のあり方について検討されていた。

避難者の多くは、早朝より仕事や自宅の片づけなどに出かけている。生活の立て直しの状況をお聞き

すると見通しが厳しい方もおり、避難所運営に忙しく動き回られている方の中には、そうすることによって気持ちを紛らわせているように感じられる方もいる。疲労が蓄積している避難者の負担を軽減することも必要であるが、個々の状況にも配慮しながら、慎重に支援していく必要がある。

### 4-3. 避難所の生活状況

避難所のライフラインについて、電気は復旧済み、通信は衛星通信(Starlink®)の設置より確保されていた。上水道の復旧は、数か月先になる可能性があり、施設内の配管も損傷している可能性があることから、安定した上水の確保には時間を要する状況である。一方で、上水道よりも下水道の復旧に時間がかかっているため上水も使えないという話も出ていた。しかし明確な確認はできていない。飲み水は、支援物資の飲料水を使用し、生活用水には山水や雨水を利活用していた。貯水タンクがあるものの給水車等による支給がないため、数日に1回は山水を何百リットルも汲んできて貯水タンクに移すという作業が続いている。

仮設トイレ、手洗い場、屋外シャワー、洗濯については、2月26日に報告のあったとおりであり変化はない。また、食事についてもこれまでと変わりなく、避難者から、避難生活の中で食事に困ったことはなかったという声もあり、むしろ、震災前には3食の食事を摂っていなかった高齢者もいたとのこと、食事の変化に伴う健康面の変化も観察を要すると考える。

## 5. 支援活動の実際

### 5-1. 被災者への生活支援と健康支援

今回の支援で特記すべきことは、発熱者の対応と感染拡大の予防である。27日夕の検温時、有熱者が6名(3家族)いた。なかでも小学生1名が39.1度、もう1名が40.1度、成人女性1名が38度であった。午前中にDMATの巡回があり薬が処方されていたこと、過去に熱性けいれん等の既往がないこと、治療中の疾患がないことなどを確認し、夜間の受診をせずに対応した。食事・水分の摂取が不十分であったため、キウイフルーツ、リンゴなどを一口大にカットしたものと、リンゴジュース、ポカリスエットなど一口ずつこまめに口にしよう個別に渡し、口にできていることを確認するのを繰り返した。また、避難所管理者や千葉県職員、消防署職員と情報共有し備えた。28日朝、発熱のあった小学生の母親が発熱したが、全体に解熱傾向となり、29日朝には、37.5度以下の有熱者が2名となった。感染拡大を避けるため、2家族は、27日午前の段階で、3階教室に各一部屋ずつに隔離されていた。もうひと家族は、1.5階で避難生活をしてきたため、トイレを使用するときなど他の避難者と接触を避けるよう声をかけ、マスク着用と手洗いの徹底を求めた。1.5階で避難生活している別家族とも感染防止のための協力を仰いだ。高齢者に対し、生活不活発病の予防を見据えて、ラジオ体操など児童との交流機会が設けてあったが、27日と28日は実施しなかった。自発的に散歩など出かけられていたため、脳トレなどをともに行った。

メンタル面で気になるという送りを受けた高齢女性がいたが、28日午後、お茶にお誘いすると快く居住スペースから出てこられ、共有スペースのテーブルで1時間ほど談笑した。29日午前中保健師チームの訪問時にも当該女性を囲み談笑することができた。久しぶりにいろんな人と話をしたと話されていたが、自分自身の人生や興味のあること、家族に対する考えなど自ら多くを語り、終始笑顔が見られた。他者と再び交流することを楽しいと感じていたようだ。また保健師チームが直接話をする機会を設けることができ、今後の支援につながると考える。

前述した避難所運営に忙しく動き回られ気持ちを紛らわせているように感じられる方のお一人は、何度か時間を共有してみたが、まだ介入が難しい段階と考える。寄り添いいつでも話ができる雰囲気ですべて接して

いく必要がある。また、懸命に忙しくされていても必要以上にやるべき仕事を奪わない配慮が必要だと感じた。その点については、保健師チームおよび避難所管理者とも共有した。

高血圧の慢性疾患を持つ方は、以前の支援を継続し、血圧手帳を持って血圧測定、記録を行っていた。

## 5-2. 中長期に向けた地域全体の継続支援の検討

今回の支援において地区ごとのコミュニティのつながりの強さを感じた。生活の再建についてどこでどのように暮らすか、揺れ動く心の動きを聴くことがあった。同じ珠洲市であっても地区によって気質が異なり、例えば大谷地区から市役所近くの飯田地区に移るのは、金沢市に移るのと同じくらい感覚であり、どちらかを選択するなら金沢市に移ると話す方がいた。コミュニティを崩すことなく現状の地域で再建するには多くの課題があると考え。個々の思いを傾聴しながら、最善の選択ができるよう寄り添っていく必要がある。

被災者でもある支援者の疲労とストレスが蓄積されてきている。自身の健康にも気を配っていただき休息をとるよう伝えてみたが十分とはいえない。過去の辛い経験を繰り返さないよう介入する必要がある。

## 6. 今回の支援活動を通しての内省と課題について

避難所は、病院ではない。当然のことであるが、過剰な支援をしようとしていないか、不足してはいないか、自問自答しながら活動した。避難生活に伴う心身への負担は、過去の災害から多くを学んでいるはずである。しかしながら、どの災害も決して同じではない。災害の種類や被災状況、個々の体験は、全く異なる。今回の災害は、この数年間で繰り返し起きた地震であること、高齢化率の高い過疎化の進んだ地域であること、半島での災害であること、近くの活断層が動く可能性が残されていることなどがある。地区から離れる決断にしても残る決断にしても大きな決断である。震災による死別、住居や職業などの喪失に加え、これまで親密にしていた人との二次的な別れがあり、心身ストレスは大きい。そのような状況を被災者の目線で感じ取り寄り添っていくことが必要だと考える。独居の高齢者も多い。決して孤独にしてはならないと感じた。